

# 「物語」を「物語る」

どうも、はやみねかおるです。児童向け推理小説を書くことを生業にしていますが、四半世紀ほど前は小学校の先生をしていました。

ぼくは、最近まで「物語る」という言葉の存在を知りませんでした。この「物語る」という言葉について、少し書かせてください。

☆

大学時代、教育学部に通っていました。三年生になり、教育実習に行くまでは、学校の先生になる気はありませんでした。在学中に小説の賞を取り、作家デビューする——これが当時の目標でした。

それが、教育実習に行って「学校の先生って、すごい仕事だな……」と思うようになりました。それから卒業までの間は、小説を書いて賞に送ることと、教師になるための勉強を頑張ることの二本立ての生活でした。

小説の方は落選続きでしたが、教職の方は採用試験も受かり、単位ギリギリのギリとはいえ卒業の目処も付き、赴任先も決まりました。

そして、卒業式の二日後——最後の短編小説を書いて、

「学校の先生は、小説を書きながらできるような仕事じゃない。二度と、小説は書かない」と、創作活動を封印しました。

☆

その後、なんやかんやいろいろあり、児童文学の新人賞を取ってしまい作家デビュー。いつの間にか専業作家になっていました。

☆

先日、新聞の取材を受けました。インタビュの中で、教室にいる子どもたちに物語を話すことから、封印していた創作活動を再開してしまったことを話しました。

そのときに書いていただいた記事の抜粋です。

「落選したから物書きとしての自分のレベルはわかったし、先生をしながら小説を書けるとは思わなかったので」

だが、「物語る」ことはやめられなかった。

☆

そう、ぼくは「物語る」ことをやめられなかったのです。教室で子どもたち相手に物語を語っていた——これが、自分の原点なんだと還暦になって気づきました。

引退まで残り三十二年。どれだけ書けるかわかりませんが、原点の「物語る」ことを忘れず書き続けたいと思います。



1964年、三重県生まれ。

令和6年度版光村図書『国語』4年下巻に「友情のかべ新聞」を書きおろし。児童向け推理小説を中心に多くの作品を発表しており、主な著書に『そして五人がいなくなる』『怪盗クイーンはサーカスがお好き』『都会のトム&ソーヤ①』（いずれも講談社）などがある。